



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.121

2013.10.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と土器の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

● 神村 透

田舎考古学人回想誌

33

「初任地は県境の小さな村 売木小中学校 (S31 35 1956 60)」

父に頼んで決まった学校は愛知県境の売木小中学校でした。飯田線温田駅から信南バスで阿南町新野(にいの)。そこで乗り換え峠を越えて売木村に。鉄道も国道も通っていない山間の小さな村。小1から中3まで1学級の併設学校。青年教師が多く、共同炊事の為一日中一緒に生活。私は教師としての心構えや実践を教えられた。この点では私は勉強になった。が 考古学の面ではただただ淋しかった。任地居住なので村内を歩き回り遺物採集をしたが小さな土器片と石器のみで遺物からの興奮は無かった。県境にある茶臼山(1415m)は愛知県一の高い山で中腹の高原は牧場で、愛知県の遺跡地名表に載っている旧石器時代遺跡。何回もバスで、或いは歩いて採集に行くが石器は採集できなかったが、道路脇の切崖で蛋白石の大きな原石を採集した。下伊那教育会教育参考館考古室に保管してある。中学1年生の担任になって遠足で愛知県北設楽郡津具村の夏目一平さん宅に行った。人数が少ないので貨客兼用トラックで訪ね夏目さん採集の遺物や民俗資料を見学した。夏目さんのところは峠を越え

た新野から愛知県東栄町田口行きバスに乗って上津具で下車すると行けたので、休みを利用して何回も訪ねた。

当時は春と秋に農繁休業・冬に寒中休みがあって職員旅行や個人旅行をした。九州一周は職員旅行。別府から鹿児島までは単独行動で、私は臼杵の石仏が思い出に残っている。鹿児島で解散。私は福岡で九州大学に森先生を訪ね念願の板付遺跡の遠賀川式土器を見せてもらった。岡山で先輩西川宏さんと岡山大学の近藤義郎さんを訪ねた。四国一周は冬で一人旅、阿島遺跡の発掘を終えて大阪に出、船で高知県甲浦に降り、そこからはバスや汽車を乗り継いで室戸岬・高知・中村・足摺岬・宿毛・宇和島・松山・琴平・高松と回り各地の郷土

玩具を集めてきた。考古学とは関係なかったが思い出に残る旅でした。

発掘調査では下伊那教育会新野支会郷土調査委員会で以前宮坂英弼先生が調査した向方上の平遺跡を調査するが成果無し。下伊那教育会郷土調査部での調査は飯田市恒川(ごんが)遺跡・龍丘村二子塚の埴輪列・飯田市善光屋敷遺跡・浪合村治部坂遺跡・喬木村阿島遺跡がある。治部坂遺跡は下伊那で最初の旧石器時代遺跡調査で廃屋での宿舎・調査を知って参加してきた大学生小林達雄・笹沢浩さんが忘れられない。阿島遺跡は深く梯子を入れての発掘で、弥生中期の阿島式土器とその住居址の検出では天竜川低位段丘での洪水の埋没を知った。

大学で考古学を学んだということで県内の調査に参加をと声が掛かった。一つは小県郡和田村男女倉遺跡。信州ローム研究会は旧石器時代の遺跡調査で開田高原古屋敷遺跡の調査についての調査。私は諏訪の藤森栄一先生宅に泊り、バスで霧ヶ峰に登り八島池の所から沢道を下った。麓の最初の畑が黒曜石片で真っ黒だったのに驚いた。公民館の本部に泊っての発掘。鈴木誠先生・小林国男先生。児玉司農武さんと親しくなり、児玉さんには後にいろいろと世話になった。トレンチでの次々と出土する旧石器に驚き、夜のミーティング、ドラム缶の風呂が懐かしい。もう一つは上伊那郡南箕輪村神子柴遺跡で、林茂樹先生からの誘いで参加した。芹沢長介さんも参加され久しぶりの出会いで嬉しかった。何と言っても長大な石槍・大きな磨製石斧・黒曜石器群の出土に驚かされた。歴史的な調査に参加できたのが本当に嬉しかった。夜 向山雅重先生が慰労だと芹沢さん・林先生と私を料亭に連れてってくれた。ご馳走を食べながら発掘での成果に興奮して話したが私は始めて食べた馬刺しが印象に残っている。此の夜は林先生と上伊那教育会館宿直室に泊まって遅くまで考古学談義でした。

*巻頭連載は隔月です。次回は塚本先生です。



▲夏目一平さん宅へ遠足(後列中央 夏目、左端 神村)



▲神子柴遺跡で(前列左2 芹沢、左3 藤沢、2列左端 林、左4 神村)

目次

■田舎考古学人回想誌	初任地は県境の小さな村 売木小中学校 神村 透 …1	■リレーエッセイ	マイ・フェイスレット・サイト(第114回) 永井宏幸 …3
■考古学の履歴書	公務員としての考古学研究者(第13回) 石井則孝 …2	■考古学者の書棚	「掘り出された京都」 齊藤真一 …4

考古学の履歴書

公務員としての考古学研究者(第12回)

石井 則孝

《わが友・わが趣味》

はじめに

私が早稲田大学へ入った昭和30年の前半には、大学直属の考古学研究室はあったものの考古学科あるいは考古学専攻なる授業は存在していなかった。従って考古学を学ぼうとする学生のほとんどは、滝口 宏先生、西村正衛先生の所属している教育学部に入學したものが多かった。文学部では、直良信夫先生が講師として教壇に立っていた。玉口時雄先生が助手、大川清先生が副手であったと記憶している。

考古学研究室は八号館の地階にあり、西村先生の机と大川副手の机が置かれ、発掘した資料が山積みになっていた。この研究室が早大考古学研究会の学生達の居場所でもあった。従って発掘に参加した学生達の整理場所であり、学内に限らず外部の方にも、この八号館へ来室すれば早稲田の考古学成果を知ることができた。滝口先生は理事であったので、大学本部に机を構えていた。

1. 考古学の先輩の方々

考古学研究会は弱少であり、昭和30年の設立であったが、何の活動をしていたのか記録もなく、金子浩昌・中村恵次・和田 哲・杉山荘平・坂井利明(敬称略)の諸先輩が出入りしていたのを記憶している。研究室へ出入りしていた面々は、先生方の補助員で、云われるままの作業をしていたようであった。

昭和34年頃から研究会活動も盛んとなり、市毛 勲兄と私が卒業する昭和36年3月にO・B会を立ち上げようと、中村恵次さんを会長にNHKに就職した佐藤俊雄さんが副会長で発足した。後に、佐藤さんが会長、私が副会長、市毛兄が事務局長を担当し、平成23年(2011)に創立50周年を迎え、盛大なる会を大隈会館で開催し「創立50周年記念誌」を刊行した。私は思い出の記録として「天空の宮殿と天空の遺跡」の題で、現在の考古学科の設立の課程についても記したので読んでいただければ幸甚である。また、市毛兄が詳細なる早大考古学会の歴史について記述しているので、この冊子を手にとりいただければ嬉しい限りである。

2. 同輩の面々

一学年上では、坂井利明、吉川國男、野村慎三郎、橋本晋がおり、吉川さんは、NPO法人野外調査研究所を立ち上げ、理事長として現在も活動している。野村さんは、青梅市の長老として活動している。橋本さんは、北海道日高でコツコツと仕事をしている。同輩としての仲間は、朱の研究者の市毛兄、東博で北方文化を研究していた池田厚史兄の二人である。渡辺賢一兄は都庁の財務部長、塚田博康兄は東京新聞の論説委員、西村寿一郎兄は日本を代表する切手研究者等多士済々で皆健在である。一人で研究を続けていた金井典美さんも忘れてはならない。健常者ではないので、長野県諏訪の霧ヶ峰高原での旧石器・御射山遺跡の発掘は、私が仕切ったが、日本の歴史に残る著作をモノにしている。後輩では文明堂印刷の関 好延兄、数百冊の発掘報告書を世に出している。大久保 進兄(独文学)、菊池徹夫兄(北海道考古学)、山中英彦兄(北九州の考古学)などが居て、日本列島改造の声と共に、馬目順一、江崎 武、宍倉昭一郎、平野吾郎、

原 信之、鈴木健夫、石山 勲、大金宣亮、十菱駿武、岡内三眞、杉山晋作、須田 勉、斉藤弘道、大脇 潔、沼沢 豊などが早稲田で学び、日本の考古学の発展の一翼を荷っている。

3. 奈文研での仲間たち

昭和39年(1964)は、東京オリンピックが開催された年で、日本人にとって忘れられない年になっている。

奈良国立文化財研究所は、前年に、平城宮跡の本格的な発掘調査を進めるべく、所内に平城宮跡発掘調査部を設置した。初代の部長に、東博の考古課に居られた榎本杜人先生が着任されていた。考古学の講座のある全国の大学に募集がかけられ、入所したのは、東京教育大から藤井 功・荒木伸介、東京芸術大から塚越正明、東大から鬼頭清明、早大から石井 則孝、明大から工楽善通・佐藤興治、群馬大から栗原和彦、国学院大から森 郁夫、日大から伊東太作・佃 幹雄・三輪嘉六、名古屋大から横田拓実、京大から横山浩一・佐原 眞、広島大から松下正司、関大から町田 章・猪熊兼勝、佐賀大から高島忠平の19名(敬称略)であった。今年入所50周年ということで何か記念の会を開こうとしたが、メンバーが約半数となり、健康を害しているものも居て会は流れてしまった。

4. 千葉県での仲間たち

千葉県には、昭和46年(1971)から55年3月(1980)までの10年間お世話になった。仕事としては、博物館・美術館の建設、史蹟の整備、成田空港の事前の発掘、公団住宅等建設の為に事前発掘に追われていた。仕事の内容が発掘にはじまって建物の建設、史蹟の整備、博物館・美術館の展示資料の調査・収集・購入等、文化財行政に拘る全ての仕事があり、毎日毎日が大変充実した多忙な日々を送ってきた。従って、考古学に限らず、建築・美術・民俗・地質といった幅広い交流があった。

また、千葉県博物館協会を設立して、公・私立協同の展覧会やそれぞれの施設での研究発表・研究誌の発行も行ってきた。市川市考古博物館オープンの際には、熊野正也・杉原重夫・堀越正行さんと「史館」という考古学専門誌も発行した。当時、共に活動した先輩・仲間としては、下津谷達男さん、加藤晋平さん、高橋在久さん、藤下昌信さん、寺村光晴さん、高崎秀雄さん、鈴木仲秋さん、梶山林継さん、川戸 彰さん、後藤光民さん、白石竹雄さんなどが居た。また、文化課や風土記の丘で机を並べていたのが、五代吉彦・山田友治・天野努・種田斎吾・西山太郎・高木博彦・鈴木道之助・三森俊彦・佐久間文孝・佐久間 豊の諸兄であった。

5. 日本考古学協会と東京での仲間

アルカ通信No. 103号の際、協会図書問題に関連して昭和50年度(1976)の委員名を記したが、半数の方々が逝去されている。この春の協会総会懇

略歴	
1936年	東京鷺宮に生まれる
1964年3月	早稲田大学大学院文学研究科芸術学専攻修士了
同年3月1日	文化財保護委員会記念物課(現文化庁)へ入省
同年5月1日	奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部へ異動
1970年4月1日	千葉県教育委員会へ異動
1980年4月1日	東京都教育委員会へ異動
1996年7月15日	東京都埋蔵文化財センター所長で定年退職。公務員生活終了
この間、筑波大学・早稲田大学等9大学の非常勤講師を歴任。昭和女子大学は70歳定年まで22年間勤務	
2001年4月1日	帝京大学文学部専任講師
2007年3月	定年退職

親会でも私が長老の方へ入れられてしまい、世の移り変わりの早さに驚ろかされている。この中で良く顔を合わせるの、西谷 正・早川智明さんぐらいではなかろうか。亡くなってしまったが良く交流していたのが、林 謙作・工藤雅樹・小林三郎・鈴木公雄・藤本 強・田代克己・古山 学・浪貝 毅・神澤 勇一・小川良祐・堤圭三郎・安達厚三さん等で、学会にとっても貴重な面々である。先日亡くなった京大の山中一郎さんは協会員ではないが、彼が高校2年の時に霧ヶ峰に現われ、発掘に参加され、それ以来の付き合いだが早逝が惜まれる。

関西へ出かけた時は京都・奈良・三重と廻ってくる。奈良の菅谷文則さん、和歌山の小賀直樹さん、三重の小玉道明・山澤義貴さん等お世話になっている。東京では数え切れないほどの友人が居るが、現在の仕事柄、良く会っているのが立正大の坂浩秀一・池上悟さん、三鷹市遺跡調査会の高麗 正・沼上省一さん、西東京市の後輩亀田直美さん、中野区の比田井克仁・民子夫妻で、去る7月29日、駒澤大の酒井清治・和子御夫妻、青木義脩さん、水村孝行御夫妻、後輩の白井久美子さん等と新宿で会合を持ったことを記録にとどめておく。

隔月連載です。次回は渡辺誠先生です。

リレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 114

朝日遺跡 ～ 愛知県清須市～名古屋市西区

永井 宏幸

朝日遺跡は愛知県清須市と名古屋市西区にまたがる南北約800m、東西約1400m、推定面積80万㎡におよぶ日本列島屈指の弥生時代集落として知られている。出土品2028点が2012年9月6日、重要文化財に指定された。指定記念事業は2013年3月から5月にかけて開催、メイン会場の清洲貝殻山貝塚資料館は1万人を超える開館以来かつてない来館者でにぎわった。重要文化財指定にいたるまで苦難の道であった。ここでは遺跡の範囲を視座に、文化財保護において薄幸な遺跡の運命を振り返りたい。

遺跡の発見は昭和の初めごろ、貝殻山貝塚付近である。1929年、加藤務(沖虹兒)、鳥居龍蔵による調査があり、その後周辺に寅ヶ島、検見塚、竹村など貝塚が見つかった。1945年以降、在野の研究者・大学による調査は小規模ながら遺跡の解明に貢献した。本格的な発掘調査の開始は、1969年から1970年にかけて、遺跡の南北を縦断する名岐バイパス(国道22号線)と遺跡の東西を横断する環状2号線(現国道302号+名二環)との立体交差事業として実施された予備調査である。この予備調査はそれまで個別の貝塚が調査対象であった遺跡の面的な広がりやを明らかにする目的でおこなわれた。紅村弘は、遺跡の範囲を東西約260m、北限は既存の調査成果である竹村貝塚などに続く包含層を確認、南限については、ほぼ現在の認識とかわらない地点を指摘している。その後名岐バイパス以東の確認調査により、さらに東方の水場川付近まで範囲が延びた(紅村ほか1972)。吉田富夫は、「遺跡が少なくとも南北の2群に分たれる可能性がある」ことを指摘しており、先見の明を感じる(吉田ほか1970)。

1971年、貝殻山貝塚周辺の確認調査の結果、隣接地で進行していた耕地整理用地から10169.4㎡を国史跡として残した。その後貝殻山貝塚資料館は1975年開館した。1972年以降は、県教育委員会が主体となって環状2号線関連の発掘調査を本格的に実施した。加藤安信は、「数力所の貝塚のみならず、多数の住居跡や方形周溝墓、溝等を包括する一連の遺跡であることが明らかになった。これらの各種の遺構はいわば有機的・時代的に結びつきながら一つの集落を構成していると判断されるのである。」とした(加藤ほか1982)。「朝日遺跡群から「群」を消去し、朝日遺跡と呼称することした」とあるように、弥生時代の遺跡としては全国で最大級の範囲を対象とした発掘調査となった。遺跡の全体像はこの時点の調査成



湧水との格闘(1985年夏:朝日遺跡60A区後期環濠)

果によって把握できるようになった。弥生前期に貝殻山貝塚周辺に誕生した集落は、中・後期に規模が拡大する。現在の名二環を北東から南西へ横断する谷を挟んで南北にそれぞれ環濠をもつ集落が形成される。集落のまわりに東西南北に墓域が形成され、そのうち東墓域は大中小の方形周溝墓群、西墓域はほぼ大きさが統一された方形周溝墓群の形成が目を見守る。この時点の遺跡範囲は東西約1000m、南北約700mであり、現在よりひとまわり小さく括っている。試掘から10年あまり続いた発掘調査は、それまでの調査成果と裏腹に、遺跡保存へとつながらなかった。そして道路建設の見直しもないままに工事は進行した。

環状2号線関連の朝日遺跡発掘調査は、愛知県埋蔵文化財センターに引き継がれ、2009年まで40年にわたり続いた。1990年代前後から隣接する宅地造成や公共事業にともなう調査は、おもに清洲町(現清須市)と名古屋市が従事し、冒頭に示した現在の遺跡範囲がほぼ確定した。1990年前後の調査成果をいくつか挙げておく。埋納銅鐸、ヤナ遺構、一辺が30mを超える超大型方形周溝墓、太平洋側では珍しい玉作り工房、そして環濠帯に附設して防御を固めた逆茂木と乱杭……。マグソコガネやルリエンマムシなど食糞・食屍性昆虫が集中して出土することから人口が集中する傍証とした森勇一による「都市型昆虫」の提唱、多種多様な生業・手工業生産を集約した集住複合型の集落構造モデルの石黒立人による提唱、これら朝日遺跡に基づく研究は弥生都市論争に沸いた大阪府池上・曾根遺跡より前に提示され、弥生都市論の先駆けであった。

朝日遺跡の新たな計画が20年前にあった。1993年から進められていた「貝殻山貝塚資料館拡充整備計画」である。貝殻山貝塚資料館の南側に、サイト・ミュージアム建設計画が進行していた。計画に先立って、予定地の発掘調査がおこなわれ、弥生時代前・中期の環濠帯、中・後期の方形周溝墓群など多くの成果があった。ところが新資料館の計画は、1997年1月に報道発表されたものの、県の財政難を理由に翌年計画は凍結された。折しも1997年6月、モナコで開催された博覧会国際事務局総会において2005年愛知万博開催が決定した頃に重なる。

2012年、朝日遺跡出土品が重要文化財に指定され、久しぶりに明るい話題となった。地域住民ならびに県民が目を向けている今、朝日遺跡からなにを発信すべきであろうか。現在、

朝日遺跡は巨大なコンクリート橋脚が林立し、迷路のようなアスファルト道路、その隙間に配置された排水路と調整池。雑草以外の緑はない、無機質な空間である。ジャンクションの周辺は住宅地、町工場がひろがり、40年前の田園風景は北集落のある北西地区に残るだけだ。遺跡の保存、遺跡の復元、サイト・ミュージアムの再構想……。ありきたりな着想ではもう手遅れだ。未来志向の空間を構築する。コンクリートの橋脚、アスファルトの道路、この無機質なキャンパスにあえて立ち向かい、2000年前の原風景を再現してみたい。湧水に立ち向かい環濠の貝層にセクションを引く往時の私は、28年前に朝日遺跡から何を学ぼうとしたのか。いまの朝日遺跡をかんがえる鍵がここにあるかもしれない。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは長屋幸二さんです。

考古学者の書棚

「掘り出された京都」

財団法人京都市埋蔵文化財研究所 編／京都新聞出版センター 発行(2012) ————— 齊藤 真一

今回紹介する本は、京都新聞出版センター発行、財団法人京都市埋蔵文化財研究所編『掘り出された京都』です。

本書は2010(平成22)年4月から2012(平成24)年6月にかけて京都新聞に連載された、京都市内の発掘調査成果を紹介する記事をまとめた一般読者向けのものです。取り上げられた遺跡数は108カ所で、対象とした時代は旧石器時代から近代に至ります。中でも平安時代の遺跡では、大極殿、内裏、邸宅や庭園といった都城ならではの調査成果や、土器や陶器・瓦の生産遺跡なども取り上げられています。

各記事は調査成果をわかりやすく紹介し、そこから見出された歴史像を簡潔ながら雄大に語っています。特に市街地における歴史時代以降の項では、都城ならではの豊富な史料や今に残る周辺文化財などと合わせ、より具体的な景観復元を交えた紹介となっています。また、時には調査担当者の遺跡・調査に対する率直な思いが述べられており、遺跡をより身近に感じることが出来ます。そして各内容には、現在その地がどのようになっているかという現状も紹介されています。現在の生活に結びつけることで、読者の関心をより深めるものとなっています。

本の構成は、以下の地域ごとにまとめられています。

- ・平安京とその周辺
- ・洛北～嵯峨・嵐山・太秦
- ・鴨東
- ・山科・醍醐
- ・鳥羽・伏見
- ・洛西
- ・長岡京周辺

それぞれのまとまりの間には、紹介された遺跡をプロットした周辺地図と、地域の歴史概観が簡単に紹介されたコラムを挟みます。A5版のサイズということもあり、この本を片手に遺跡を訪ねることも可能です。往時に想いを馳せると共に、地下に眠る遺跡、古都京都に今も残る周辺の遺産、そして時間を積み重ねながら変貌を遂げてきた都市の今を

通し、重層的な歴史を肌で感じることもできるでしょう。

この本は一般の読者を対象としたものですが、そこには遺跡をより身近なものとして感じさせる工夫が講じられています。調査・研究実績の上に成り立った、調査成果の分かりやすい解説。発掘調査の成果と調査後の状況(現状)を併せて掲載する構成をとること。発掘調査担当者の思いを掲載すること。こういった工夫と共に、カラー写真を用いて、多くとも800文字以内に収められた各記事は、テンポ良く読むことが出来る中にも、現在の生活空間の足元に埋蔵文化財の存在が密着しているという主張が読み取れます。地域史ですが、本書のあとがきに示されている目的のとおり、発掘調査成果の公開を通して一般の方々に埋蔵文化財を身近に感じ、そしてそれをより楽しむためのツールとして非常に良くまとめられた本であると思います。

先日アメリカ合衆国の観光雑誌「トラベル・アンド・レジャー」において、世界の人気都市ランキングで京都が5位に入賞しました。この結果について、京都市は「景観政策などへの地道な取り組みが結果に現れてきたのでは」としていますが、その地道な取り組みの根本的な部分(地域住民の文化財に対する理解)に、本書や基となった新聞への連載が担ったものもあったのではないかと思います。

現在私は埋蔵文化財調査組織に勤務しています。日常的な業務は発掘調査から報告書作成を主としていますが、一方では普及・啓発事業として、発掘成果や調査・研究内容など、情報を発信して行くことも行っています。そこでは紹介したこの本のように、工夫を凝らしながら、埋蔵文化財と一般の方々を繋ぐ架け橋としての役割を、より明確な狙いを持って実践していきたいと思っています。

アルカ通信 No.121

発行日 2013年10月1日
 企画 角張淳一(故人)
 発行所 考古学研究所(株)アルカ
 〒384-0801 長野県小諸市甲49-15
 TEL 0267-25-0299
 aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp